

2 海外都市行政視察 総括

団長 原 俊司

平成30年8月23日開催の第1回打ち合わせ会において、6月26日開催の各派代表者会議での申し合わせ事項に基づき、平成30年度松山市議会議員海外都市行政視察団を結成し、同日、団長、副団長の選任を行い、決定した。

また、視察団全員で松山市議会議員海外都市派遣実施要領を確認のうえ、視察先、視察内容等について慎重に審議を行った。

視察先については、実施要領第3条の「姉妹都市及びその近隣の都市」としており、まず、ドイツ・フライブルク市とアメリカ・サクラメント市のどちらの方面を視察するか、議論した。今回の視察団メンバーの多くは、前任期中にドイツ・フライブルク市への視察を経験していたこと。また、議会視察団としては2012年1月に姉妹都市提携30周年にあわせて視察して以来、サクラメントへの訪問を7年間実施していない状況であったことなど、過去の視察の状況を踏まえ、視察先及び大まかな視察内容を個々に意見聴取を行った結果、意見の一致をみて、今回の視察先は、アメリカ・サクラメント市との友好交流を図るとともに、その近隣の都市の視察を選定することとした。

そして、打ち合わせを重ね視察先及び視察内容は、サクラメントでは、「市長等への訪問・姉妹都市関係者との友好交流・消防の活動・小学校、高校の訪問・子育て支援」、ナパでは、「農業施策」、ロサンゼルスでは、「観光資源を利用した都市開発・都市計画・スポーツ振興」、サンフランシスコでは、「観光資源を利用した都市開発・離島振興・水産業振興」、サンノゼでは、「日本人移民の功績」と決定した。

9月11日には、議会事務局が市内旅行会社7社を対象に説明会を実施し、視察旅費の上限及びその他諸条件、視察先及び視察内容などの決定事項を提示し、各社から企画書の提出を求めた。その後、同月28日開催の第3回打ち合わせ会において、各社から提示された企画案を十分に審議したのち意見の一致をみた企画案を決定し、採用することになった。後に議会事務局から「株式会社伊予鉄トラベル」との報告を受けた。

11月14日には、松山サクラメント姉妹都市協会の水島富幸子副会長とサクラメント市職員で姉妹都市交流担当のステファニー・ミズノさんが来松しているとの情報が入った。これを絶好の機会と捉え、今、直接会って視察当日の手配などをお願いをすることがベストと考え、観光・国際交流課を通じて打ち合わせをさせていただくことができた。



(サクラメント市、協会と打ち合わせ後)

私と長野副団長に加え議会事務局、観光・国際交流課職員も同行し、サクラメントでの視察先等、こちら側の希望事項を説明し、全面的なバックアップについて依頼し快諾をいただいた。

12月定例会開会日の12月13日には、平成31年1月27日から2月4日までの9日間の日程で視察先及び7名の視察団の派遣承認を受け了承された。

また、12月27日には、視察の内容別に松山市の現状及び視察先の状況等を各担当課から説明を受ける勉強会を開催した。本市の事業内容の再確認と視察先の現状を予習し、現地視察時に理解しやすいように事前準備した。

(1日目)平成31年1月27日の出発日には、清水宣郎議長、大亀副議長をはじめ、松本理財部長や理財部職員及び議会事務局職員の出席のもと、松山空港の待合室で出発式を挙行了。出発式を終え、清水議長ほか出席者の見送を受け、視察団7名と随員職員1名は、17時25分発の羽田空港行に搭乗、羽田空港で出国手続きを終え、所要時間約10時間の予定で一路アメリカ ロサンゼルスへ出発した。

ロサンゼルスには、1月27日の17時に到着(時差は17時間、日本時間では、28日午前10時)、気温は日本とほぼ同じで暖かく感じた。到着後、専用車でロサンゼルスの日系ホテルに移動し宿泊した。時差での体調管理もあり早々にホテル内で食事を済ませ、次の日に備えた。

(2日目)1月28日朝、専用車にて最初の視察先である、カルフォルニア州にある日本人街のひとつ、ロサンゼルス市内のリトル東京サービスセンターを訪問した。35年以上に渡り、ロサンゼルス郡に生活する日系居住者のために、コミュニティー提供、福祉情報、幼児から青年までの教育、留学生のサポート・カウンセリング、DV被害者サポート、法律相談・行政手続き等の申し込みのサポートなど、さらには低所得者世帯への住宅運営管理など、多岐にわたる。日本であれば行政の責任として実施している行政サービスである。財源は、行政からの補助金や助成金のほか、多くは寄付金で運営している。日英両語他7つの言語でソーシャルサービスが提供されており、日本人に限らず社会的弱者のサポートを他のボランティア組織と協力して様々な問題解決をしている。ボランティア活動の歴史を重んじ、スタッフの皆さんが仕事を誇りに思い、使命感にあふれていた。本市はこれから、インバウンドへの対応、働き方改革や人手不足解消のため、改正入管法施行後に外国人就労者を受け入れる準備をしなければならない。

多様な国の方々へ、行政手続き、住居の情報提供等、官民連携での受け入れ対応が急がれる。



(野茂英雄投手の写真)

午後からは、スポーツ振興の内容でメジャーリーグナショナルリーグ西地区所属のプロ野球チーム「ロサンゼルス・ドジャース」の本拠地ドジャースタジアムを視察した。ドジャースに在籍した日本人選手は95年の野茂英雄投手を皮切りに、石井一久投手、木田優夫投手、中村紀洋内野手、斎藤隆投手、黒田博樹投手ほか、現在は、2016年から前田健太投手が活躍しており、2年連続のリーグ優勝を果たしワールドシリーズへ進出した。

プロスポーツがビジネスとして定着をしているアメリカは、野球を始め、北米で展開する男子プロバスケットボールリーグNBA等があり、アメリカ最大のスポーツであるアメリカンフットボールの最高峰の大会であるNFLの2018年のチャンピオンの座をかけたスーパーボウルは、2月3日に、ジョージア州アトランタで開催され、全米がお祭り騒ぎで、お店も休業する程盛り上がっていた。



(展示物の見学)

ドジャースタジアムは、1962年にオープンし、アメリカで3番目に誕生した野球場でありながら、古さを感じない。メジャーリーグの中で最大級の5万6千人を収容、1万6千台もの駐車場を完備し、野球以外にも結婚式などに有料で貸し出しされている。グラウンド、バックヤードでの歴史展示や、普段は

入ることができない記者室、放送中継室、選手のダッグアウト、日本企業がスポンサーであるVIP用のラウンジ「LEXUS CLUB TOYOTA」など球場全容の説明をいただいた。アメリカのプロスポーツは、国内はもとより世界中に絶大な経済効果があり、松山は野球王国のまちであるため、多



(展示物の一部)

くの市民が「松山にプロ野球球団の本拠地へ」と願っているのではないのでしょうか。今後もスポーツへの支援は、市民への健康づくりだけでなく、プロスポーツを育成そして誘致するなど地域経済の視点をもって継続した施策が必要であると感じた。

次は、再開発事業としての映画産業の本拠地であるハリウッド地区に移動した。ハリウッド地区は映画産業中心の街だが、駐車場不足などから通過点になりがちで観光客誘致には再開発が必要であった。ロサンゼルス市が1986年にハリウッドを再開発地区として認定したもので、ロサンゼルスにおいて都市再開発事業（中心市街地活性化事業）の代表的事例である。官民協働事業で、官民で再開発におけるリスクを分担した。ハリウッド&ハイランドは、2002年から毎年アカデミー賞の授賞式が行われる場所で、数多くの著名な俳優や映画監督などが優雅にレッドカーペットを歩く姿は世界中の人々が注目する。ドルビーシアター（旧コダックシアター）、映画館、小売店舗、レストラン、映画関連展示、ホテルを併設している。利用した駐車場は、なんと地下6階建て3千台を収容する。リスクを解消するための徹底した再開発に、正に世界のハリウッドを感じた。

（3日目）1月29日には、観光地の再開発事業で成功しているサンタモニカ

地区のサンタモニカプレイス（ショッピングセンター：以下SC）とサードストリートプロムナード（商店街：以下地元商店街）の商業エリアを視察した。

郊外の大型ショッピングモールより優位にあると言われている地元商店街は1960年代からの郊外大型ショッ



（サードストリートプロムナード）

ピングセンターの誕生により低迷、商店街を再開発するも現状は変わらず、SCを誘致した。SCは集客に成功したが地元商店街の現状は変わらず、その後、SCは物販、地元商店街はレストランやサービスなどの非物販と棲み分けしたことで大成功し、サンフランシスコ有数の商業地域となる。その後世界ブランドの物販が地元商店街に進出し、今度はSCが衰退、1989年にはSCが全面改築し、ブランド物販をはじめ60もの専門店、フードコート、レストラン、オープンエリアを備え、SCも見事に復活した。地元商店街とSCが互いに切磋琢磨して、見事に共存共栄を模索し成功した事例である。コンパクトシティを形成している商業観光都市である本市は、JR松山駅～いよてつ高島屋～銀天街～大街道～三越～ロープウェイ街、更には道後まで、一連の流れを構築し、それぞれの商店街がコンセプトを持ちポテンシャルを高くして、中心部に展開する大型店と地元商店街が共に切磋琢磨しながら共存共栄を目指し、都市開発の中で行政ができる構造改革支援を推進していく必要がある。これから進めるJR松山駅前・市駅前・銀天街L字地区の再開発や二番町通りの街路空間整備などを控え、恐れることなく外資や大手商業施設デベロッパーを誘致することを検討し、魅力ある街づくりを構築するために、官民一体となった更なる取り組みが必須と考える。

その後、サクラメントを視察するために、ロサンゼルス空港からサクラメン

ト空港へフライトし、姉妹都市入りした。ありがたいことに宿泊先では、松山サクラメント姉妹都市協会（以下：サ協会）グロリア・エスペホ会長、水島富幸子副会長夫妻の丁寧なお出迎えをいただいた。翌日の市長表敬訪問をはじめサクラメント滞在中の全スケジュールについて、詳細な打ち合わせを行い、円滑な訪問とするため万全な体制を整えた。



（カリフォルニア州議事堂）

（4日目）1月30日は、専用車にてホテルを9時前に出発しカルフォルニア州議事堂を視察した。州では、行政区の中心はサクラメントに集約されているとのこと。日本で有名なハリウッド映画スターのアーノルド・シュワルツェネッガーが州知事を務めていたことでも知られている。

格調高い柱にドーム屋根を備えた、州議会議事堂は、ワシントンD. C. の連邦議会議事堂に倣って新古典主義建築様式で設計・建設、1869年に完成した。1973年に国家歴史登録に指定されている。

料金は無料で見学できる。展示物等で歴史を学ぶことができたり、州務長官、財務長官、知事の執務室や州議会の上院及び下院の議場を傍聴席から見学することができた。

その後、サクラメント（以下：サ）市庁舎に移動し、まずは、サ消防局から、昨年発生した、米カリフォルニア州北部での山火事の活動について、現場の消火活動に従事された消防局4名の職員のレクチャー



（サクラメント市庁舎）

をいただいた。広域火災であるためサ市に所在するカリフォルニア州森林保護防火局（カルファイヤー）が中心となって各行政区の消防局と連携して活動にあたった。

カリフォルニア州は、通常なら10月から雨期に入るものの昨年は、雨がほとんど降らず、植物は真夏並みに乾燥していた。それに加え秋から冬にかけては、強風によく見舞われたという。このような中、昨年11月にサ市から130キロほどの州北部のパラダイス周辺で山火事が発生した。パラダイスは退職後の人々が余生を



（消防局職員からの説明）

過ごす楽園として知られている町で、多くの住宅が焼失、ライフラインの電柱が木製だったため、連絡網が途切れ安否確認や避難指示が極めた。また、車を所有していない方が多く避難が難しかったとのこと。また、現地に駆け付けた車が大渋滞を引き起こしたとのこと。街の名前（パラダイス）からも皮肉な結果となったことをとても残念がっていた。本市でも災害時の避難についても難しい課題があるように、アメリカでも個人の権利が強く避難情報を伝えても本人の意思が最優先され強制的に避難を実施することができないなど多くの問題があったようだ。ロサンゼルス近郊の山火事が発生し、カリフォルニア州全体で、死亡者63名、行方不明者631名、焼失家屋1万3千戸、焼失面積5万7千ヘクタールと被害総額は1兆5,000億円と言われている大火災であった。消防職員は州で約4万人、日本のように、町内会や地域自主防災組織のようなものはないが、約2万人の州消防ボランティア職員がいて、後方支援は、赤十字が中心的な役割を担って他のボランティア組織との調整及び繋ぎを実施しているということだった。個人の権利が尊重されるアメリカとは違い、日本

は地域コミュニティーを充実させて、防災減災を目指す方策は素晴らしいと感じた次第である。

昼食会は、サ協会の水島夫妻、サ市職員3名が同席して、通訳を交えて視察団全員がコミュニケーションをとりあい、プライベートな話も含め、楽しく充実した交流が図れた。

その後、サ市庁舎に戻り、ダレル・スタインバーグ市長（以下：サ市長）を表敬訪問する。サ市長は、現在59歳、2016年12月に就任、元カルフォルニア州上院議員で職業は弁護士である。先に会食した職員の方々にも同席いただき、緊張して会議室で待つ。登場されたサ市長は大変フレ

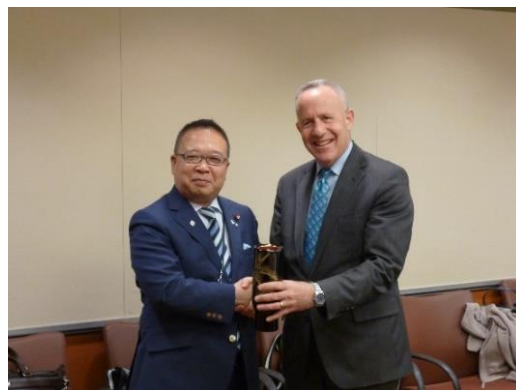


（サクラメント市長表敬訪問の様子）

ンドリーな方で視察団全員を最高の笑顔で迎えて頂き、一人一人とも握手をしていただいた。平成28年（2016年）10月には、姉妹都市提携35周年記念としてサ市の訪問団が本市を訪れ、その翌年の平成29年（2017年）5月には、35周年の答礼として野志市長、雲峰議長をはじめとする訪問団がサ市を訪れている。正式な市議会訪問団では、サ市長への表敬訪問は初で時間も30分いただき、丁重な対応に敬服した。私からは、本年8月で38年を迎える姉妹都市提携への感謝と、相互の姉妹都市協会の交流活動、今回の視察内容など説明させていただいた。

サ市長からは、歓迎のご挨拶で、2021年に迎える姉妹都市提携40周年には、サ市視察団を結成して松山市を表敬訪問することを希望している旨のお話をいただいた。さらにこれまでの行政、大学、民間による、文化・教育・スポーツ交流に加え、両市の企業間によるビジネス交流を発展させたいとの要望があった。そこで、本市に持ち帰り市長や本市サ協会へお伝えすることと、両

市とも姉妹都市協会のメンバーには企業人も多く所属している。今後、サクラメント松山姉妹都市協会や松山国際交流協会の企業メンバーが中心となり、お互いの姉妹都市協会の中でビジネス交流のチャンネルをつくっていくことを提案させていただいた。



(サクラメント市長と原団長)

表敬訪問は、和やかな雰囲気では終了したが、このような貴重な時間をいただいたことに感謝する。

サ庁舎を後にして次に、教育・スポーツの交流の視察へと向かった。姉妹都市提携を機会に両市の多くの学校の交流が始まっている。「市立さくら小学校とサ・マツヤマ小学校」「市立道後小学校とサター・ミドルスクール」「市立和気小学校とオーチャード小学校」「県立松山商業高等学校とグラント・ユニオン・ハイスクール」



(サクラメントマツヤマ小学校正面)

「県立松山工業高等学校とフットヒル・ハイスクール」「松山聖稜高校とハイランド・ハイスクール」「新田青雲中等教育学校とCKマックラチー高校」その他大学では「愛媛大学医学部とカルフォルニア大学ディビス校」「愛媛大学国際連携推進機構とカリフォルニア州立大学サクラメント校」が提携している。

今回の視察では、「市立さくら小学校とサ・マツヤマ小学校」相互のインターネット会議及びCKマックラチー高校の日本語の授業などを視察した。

サ市役所を後にし、まずは1993年に開設したサ・マツヤマ小学校を訪問した。15時に到着し、校庭に記念植樹された桜の木や松山城のパネルなど学

校施設を案内していただいた。

この後、さくら小学校とのチャットを使った授業が始まるということで教室に案内された。この授業は、2001年から始まり現在も続いている。パソコンからプロジェクターでスクリーンに大きく投影し実施していた。授業が始まると互いのPRや出し物を披露するなど、趣向を凝らした多彩な内容で先生のサポートを受けなが



(チャットを使った授業風景)

ら交流していた。サ・マツヤマ小学校を訪問していた我々は、さくら小学校の生徒の出し物等を拝見したが、流暢な英語で交流をしていた。このように生きた英語を学ぶことは、貴重な経験でグローバル社会といわれる現代において、今後、海外で活躍できる大人となっていきたいと大きな期待をしている。授業の終わりには、チャットを通じ、さくら小学校に向けて、私から激励させていただいた。

18時から、サ協会主催による私たち視察団に対し、歓迎の夕食会を開催していただいた。グロリア・エスペホ会長、水島副会長夫妻、協会理事6名、愛知県人会5名（サ協会の一員*愛媛県人会は、サ市にはない。）、両市で活躍している松山出身のハープ奏者の古佐小さん夫妻、そして、愛媛大学から留学している森貞佳澄さん（前松山マドンナ大使、三味線奏者）など大勢で、もてなしていただいた。私の挨拶では、今回の視察及びこれまでの交流について、ご尽力頂いていることに感謝申し上げ、姉妹都市提携40周年には、来松して頂けるようお願いをして松山での再会を誓い合った。また、視察団全員は、通訳を通じての会話だけでなく、知っている英語と身振り手振りを駆使しプライベートなど踏み込んだ話もしながら言葉の壁を越えた、心が通じあう交流がで

きた。今後において、良好な交流に繋げることができて安堵している。



(CKマックラチャー高校での歓迎)

(5日目) 1月31日でサクラメント滞在では2日目を迎え、8時にCKマックラチャー高校に到着し、正面玄関前では、日本語教員をはじめ日本語教室の生徒さんによる歓迎を受けた。早速、校舎内に案内され日本語の授業を視察した。

同校は、新田青雲中等教育学校(以下:新田青雲)と2016年5月の姉妹都市提携35周年サ市訪問時に姉妹校として提携、同年7月には、同高校から18名の生徒が新田青雲を訪問するなど、交流が続いている。今年度は、新田青雲側から同校へ訪問しての交流予定と伺った。

同校では、日系の生徒に限らず日本語の授業に人気があるそうで、実際の授業を拝見したが、日本語に親しみやすくするために楽しく行っていた。授業は、漢字をパネルで示し、読み方を挙手する内容で正解すると全生徒から拍手されていた。授業後は、生徒5名が、流暢な日本語で校内を案内してくれた。校内は、アメリカンスタイルで廊下に沿って、生徒のロッカーが併設され、講堂は、立派なもので松山総合コミュニティセンターの



(日本語の授業の様子)



(校長先生と一緒に)

キャメリアホールと同程度だった。最後に、校長先生から視察団訪問について校内放送でご紹介いただき、更に私からもお礼の放送をさせていただいた。校長先生をはじめ日本語教員、日本語教室の生徒さんに心より感謝する。両姉妹校を通じて子どもたちや青年が、今後も積極的な交流が続くことを願っている。これからの時代は、国際競争力が激化しグローバル社会に対応できる人材が求められている。次代を担う生徒の今後の活躍を期待する。

高校を後にして次は、父親と家族のためのセンターを視察した。

リック・ジェニングズ会長の出迎えを受け、活動内容の説明やセンター内を案内いただいた。

アメリカの状況は、婚外子率約30%、離婚率50%で父親不在の子どもは全体の33%を占めるという。ひとり親は、貧困等が原因で、ドラッグなどの非行犯罪も引き起こしやすい環境にある。その問題を解決するために同センターは1994年に設立された。同センターの会長に1997年から就任しているリック・ジェニングズさんは、2014年からサ市議会議員を兼任（現職）し、2016年にはサ市副市長に就任、副市長時代に姉妹都市提携35周年を迎え、同年サ市訪問団長として来松され、「アメリカ・サクラメントの事例から学ぼう「父親の子育て参加促進のための方策」というテーマで講演をいただいた。会長は、過去にアメリカンフットボールのスーパーボウル出場経験をもつスーパースターである。

職員全員とスタッフ全員とボランティアスタッフにも紹介していただくと共に意見交換し、交流を図った。

サクラメント市の視察に同行していただいた、サ協会のエスペホ会長、水島副会長夫妻、足立理事と別れ、次の視察先の牧場に向けて出発した。

到着したコノリー牧場は、農業施策として、カリフォルニア州郊外ナパ地区にある農業を軸とした施設（農園）で、農業のあり方や大切さを楽しく学ぶ農

業と教育の機能を併せ持った複合施設である。アメリカは広大な大地であるため大規模農業が主流であったが、最近は食の質や安全を求める傾向の方が増えてきたとのこと。このような背景により、最近では、消費者が直接、農産物を届ける小規模生産者と繋がりを持ち、農業を身近に感じてもらいながら楽しさなどを共有するようになってきたとのこと。更には、子どもたちが農業体験や動物に触れることで、自然環境の大切さを学ぶために、あえて人の手を加えることなく自然の状態のままで遊び場を提供している。この施設は、寄付金のみで運営されており、入場料は無料という。このような制度を日本で実現するには、実績を積み上げ良い結果を示していくことが必要であるうえ、寄附金として個人や一般企業から多額の資金調達は困難と考える。アメリカのように理念と行動が認められ寄付金だけで運営できることは大変素晴らしいと感じた。日本にも寄付金の税制優遇などメリットがあるように検討すべきと思う。



(アルカトラズ島)

(6日目) 2月1日は、3都市目の視察となるサンフランシスコである。まずは、離島振興として、アルカトラズ島を視察した。サンフランシスコ湾内にあり港から約2キロのところに浮かぶアルカトラズ島は、西海岸で初めての灯台が建てられ、軍事要塞、軍事監獄、そして1963年までアメリカ連邦刑務所として使用されていた。ザ・ロック、監獄島とも呼ばれている。1972年、国立レクリエーションエリアの一部に指定され、1986年には、国立歴史的ランドマークに認定された。長崎の炭鉱の島、軍艦島を彷彿させる。歴史的建造物は、建物だけでなく歴史がしみ込んだ生きた歴史を知ることが可能で、未来に残すべき建造

物として保存することが重要である。このように離島振興策として、島特有の資源を保存することも含め最大限に活かし、観光振興による島の活性化も一つの手段になることを教わった場所であった。

次に視察したのは、サンフランシスコ半島の北部に位置する漁港に隣接するフィッシャーマンズワーフを水産業振興として視察した。ここは、歴史ある漁港で、漁船が多数停泊し、魚やエビ・カニ類を水揚げする場所であったが、遊休化荒廃化した倉庫や工場を再利用し、水揚げした新鮮な海産物を食べさせるレス



(フィッシャーマンズワーフ入口)

トランや店舗があり、ウォーターフロント開発により人気の観光地と生まれ変わり、開発が成功した場所であった。次に視察したのは、観光資源を利用した都市開発で、ゴールデンゲートブリッジを一望できるゴールデンゲートブリッジウェルカムセンターを訪問した。今回の視察で初めて雨が降るあいにくの天候となったが、センターは、たくさんの観光客でにぎわっていた。サンフランシスコを代表するゴールデンゲートブリッジは、天候や季節、時間帯によって様々な姿を醸し出す、1937年に完成した歴史ある吊り橋である。1964年までは世界一の吊り橋で、瀬戸大橋とは姉妹橋関係を結んでいる。もともと橋は、交通の利便性を求め建設されるもので街の流通交通を一変させる力があるが、橋の景観に魅了され観光資源としても大きな役割を果たし街の流通と観光資源の両面から活性化が図れる。幸いにも四国には、「しまなみ海道」・「瀬戸大橋」・「明石海峡大橋」と3つも連絡橋があり、この橋の魅力を最大限に活かす方策をさらに考えなければならない。

次は、サンフランシスコ市内を走るケーブルカーに乗った。乗車してみて感

じたことは、坂が多いサンフランシスコならではの乗り物であるということである。どの坂もかなり急で、自車の原動機で自走するには無理で、路面に埋め込んだケーブルに引っ掛けて運行していた。また、レトロなケーブルカーは、坂のある街並みと乗る人が一体となった風景そのものに溶け込んでいくのが魅力だ。本市でも、坊っちゃん列車や路面電車が走っているが、ケーブルカーも同じように市民や観光客の乗り物として利用されている。それぞれに事情はある



(ケーブルカーの操作部分)

が、地域の特性を活かした公共交通の充実を図り、街の景観に溶け込むことや歴史を感じられる風情を守ることも考慮しながら街全体の大きな視野で検討すべきと思った。

この日最後の視察となるフェリー・ビルディングマーケットは、フェリー発着場に併設された商業施設で昔ながらのフェリー・ビルディングを改装し、今では、マーケットプレイスとして生まれ変わっている。外観には、街のシンボルである時計台が目印である。ビル内部は、地産地消を目指した地域密着型のマーケットとなっており、レストランや食品、雑貨店などが立ち並んでいる人気の観光スポットである。フェリーターミナルとしても機能しており、ゴールデンゲートブリッジやアルカトラズ島の便の発着となっている。特性を活かし魅力をPRしながら港が接合拠点として整備され、他の交通機関との繋ぎとしての役割を果たすことにより、フェリー便の廃止や減便に歯止めがかかり、併せて、商



(フェリー発着口)

業施設も相乗効果により発展したのではないかと考察する。近年、瀬戸内航路では、交通事故や過労死の防止のために労働基準法が厳しくなり法改正される中、陸路での長距離運転から、安全とコスト削減につながるとフェリーを使った流通が見直されている。今後、松山観光港の定期便を復活し、港が海の玄関であり接合拠点を有する魅力ある施設となるよう、また、松山港外港への継続した大型クルーズ船寄港誘致し、三津浜地区の活性化も望む。

(7日目) 2月2日は、視察最終日を迎えサンフランシスコからサンノゼに移動し、日本人移民の功績として、ジャパントウン及び日系アメリカ人博物館サンノゼを視察した。



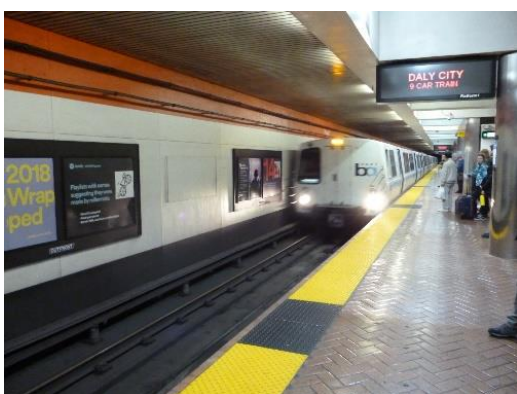
(ジャパントウンにある寺院)

カルフォルニア州には、日本人街と称される街が3か所残っており、ロサンゼルスで視察したリトル東京とサンフランシスコのジャパントウン、そして今回視察するサンノゼのジャパントウンがある。10時から地域住民で日系のハヤシダさんの案内により、ジャパントウンを歩いて視察した。まず、感じたことは、街並みや店舗、寺院、看板など、まさしくここは、日本の風情を感じることができた場所だった。特に、店舗の看板には漢字で表記され、商品も祭りの法被や日本人形等、日本ならではのものが溢れ、飲食店の入り口には日本と同じような精巧な食品サンプルがあった。また、寺院は第二次世界大戦の抑留キャンプから解放された日系人が一時的に住んでいたとのことで、庭も日本庭園になっていた。昼食をはさみ午後からは、日系アメリカ人博物館サンノゼを見学し、日系人の功績に伴う苦労や戦時中の苦悩を学んだ。日系三世の世良マイケルさんから日本語

で説明していただいた。

サンノゼのジャパントウンは、先に移住していたチャイナタウンと一緒に開発されたとのこと。日系移民の多くの方が、農業で生計をたて、日本人の特性である勤勉で作業の効率化を追求しながら、サンフランシスコの農作物生産におけるシェアを圧倒していくにつれ、地元の農家の嫌がらせも激しさを増し、多くの妬みによる迫害や差別を受けたという。移民の長い歴史の中で、一番の試練は第二次世界大戦で、戦時中は収容所での生活を強いられ、農地も手放せざるを得ない状況と、当時はかなり厳しい生活だったという。それでも、たくましい日本人は、収容所で農作物や工芸品などをつくっていたという。日本と戦っていたアメリカからは迫害を受けないように、現生活を維持するための手段として多くの日本人がアメリカ軍に協力し、若者は戦地に向かったことで、「当時の日本人の行動がアメリカでの信用を得て、戦後日系人の地位は復活しました。」と説明されたことが印象深かった。

改めて、日本から遠く離れた、このアメリカで日本人として活躍と飛躍ができたのは、自国を誇りに思い、愛する気持ちの強さが大切であると気付かされた場所であった。



(鉄道での移動)

(8日目) 2月3日は、ホテルを8時にチェックアウトし、最寄りの駅まで徒歩で移動し、鉄道でサンフランシスコ国際空港に向かった。今回利用した鉄道「バード」は、サンフランシスコ・ベイエリア高速鉄道公社が運営しており、2004年にアメリカ合衆国公共交通協会から本国の中

で一番優秀な輸送システムであると認定されている。キップの購入は、日本の

ように金額ボタンを選択するのではなく、金額をボタンでアップダウンする方式であった。乗車時間は、約30分だった。駅のホームは地下から出発したが、地上を走ったり地下を走ったりを繰り返して走る路線だった。また、自転車を車内持ち込みできるのも特徴である。サンフランシスコ国際空港には、9時過ぎに



(車内に自転車)

到着し、その後、出国手続きを済ませ11時過ぎのフライトに備えていた。実際のフライトは、2時間程遅延したが、無事に成田空港に到着し、バスで羽田空港に移動し松山に帰った。

松山空港到着ロビーでは、清水宣郎議長をはじめ大亀副議長、議会事務局職員のお迎えをいただき、解散式を無事に終え視察終了となった。

結びに、以上が私の所感であるが、今回の視察では、怪我や病気もなく、大きなトラブルもなく、全員無事に帰国することができて安堵した。

このように今回の視察が円滑に行えたのも、団員一人ひとりのご協力と随行職員や添乗スタッフ皆様のおかげであり、団長として深く感謝を申し上げます。

また、正副議長をはじめ快く視察をご承認いただいた市議会議員の皆様にも深く感謝申し上げます。

また、今回の視察で本市と姉妹都市であるサクラメント関係者と友好の絆をさらに深めることができた。今後においても、さまざまな分野で交流を重ねながら、両市の友好関係がより一層深まるとともに、こうした関係が末永く続くことを念願している。

現在、我が国は、人口減少社会の到来や少子高齢化の急速な進展により、生産年齢人口の減少による経済規模の縮小と高齢化率の上昇による社会保障の負

担増など、数多くの問題に直面している。このような中、地方においても、地方創生に取り組んでおり、地方の特性を活かしながら地域の実情に応じた社会整備を図り各種施策を推進していくことが、本市のさらなる発展と市民福祉の向上につながるものと確信している。

今後は、今回の視察で学んだことを議員活動に反映し、本市の実情に即した最良の結果を導き出し、市民の幸せのために取り組んでいきたい。